地 理 歴 史

1　地理歴史科の学習指導の改善

(1)　学習指導の改善の視点

地理歴史科の各科目の学習指導においては、日本や世界の諸事象に関心をもって多面的に考察し、国際社会の中で主体的に生きる資質や能力を育成することが重視されていることを踏まえて、網羅的で知識偏重の学習にならないようにするとともに、社会の変化に自ら対応する能力や態度を育成する観点から、内容の一層の重点化を図り、学び方を学ぶ学習や主題学習を充実させることが必要である。

(2)　効果的な学習指導

ア　世界史A・B

(ア)　世界史Aでは、前近代史を一層精選して構造的に把握させ、16～19世紀は一体化する世界を大きくとらえることとし、世界史Bでは、従来の文化圏による構成を地域世界別の構成とし、それぞれの時期に最も重要な役割を果たした地域の動向に着目して、同時代の世界の全体像を動態的にとらえるように工夫されたことなどを生かして、学習内容の一層の重点化を図ることが重要である。

(イ)　主題学習が「内容」に位置付けられたことを踏まえ、適切な授業時数を確保することが必要であり、世界史Aの「(3)　現代の世界と日本」及び世界史Bの「(5)　地球世界の形成」に位置付けられた主題学習については、生徒の主体的な追究を通して、人類の直面する課題を歴史的視野から考察し、未来を展望する能力・態度を培うよう学習活動を工夫することが大切である。

(ウ)　世界史Bの「世界史への扉」については、歴史に対する関心を高め、世界史学習への意欲を育てることをねらいとしていることを踏まえ、適切な授業時数を確保することが必要である。

イ　日本史A・B

(ア)　日本史Aでは近代社会が成立し発展する過程に重点を置き、近現代史を中心とする我が国の歴史の展開を、世界史的な視野に立って我が国を取り巻く国際関係や地理的条件と関連付けて考察することとし、日本史Bでは、世界史的視野に立って我が国の歴史の展開を総合的に考察させるとともに、時代をできるだけ大きく総合的にとらえるように工夫されたことを生かして、学習内容の重点化を図ることが重要である。

(イ)　主題学習が「内容」に位置付けられたことを踏まえ、生徒の主体的な学習を重視し、作業的、体験的学習や多面的、多角的に考察させることを通して、歴史への関心を高めるとともに、歴史的思考力を培うことを一層重視する学習を展開することが求められる。

(ウ)　日本史Aでは「(1)　歴史と生活」、日本史Bでは「(1)　歴史の考察」において、導入としてあるいは適切な時期に実施するよう構成されていることを踏まえ、指導計画に適切に位置付けて指導するとともに、授業時数を確保することが必要である。

ウ　地理A・B

(ア)　地理的な見方や考え方及び地理的技能は、地理Aでは地図の読図・描図や地域調査などの作業的、体験的な学習を通して、地理Bでは地理的事象を系統地理的、地誌的に考察する地理的な探究の方法を学ぶ学習を通して身に付けさせることが必要である。また、身に付けた地理的な見方や考え方及び地理的技能を、地理的考察が有効な現代世界の課題を追究する過程で活用することにより、学び方を学ぶ学習を充実させることが大切である。

(イ)　主題学習的に取り扱うよう構成されている項目については、現代世界が取り組んでいる諸課題を地理の特質を生かして考察し、現代世界の特色に対する理解を深め、地理的な見方や考え方に慣れ親しませる学習ができるよう配慮するとともに、細かな事象や高度な事項・事柄には深入りしないよう留意することが必要である。

(ウ)　事例として取り上げる国や課題及び項目間の選択等に当たっては、生徒の特性、学校所在地の事情、資料の入手のしやすさ等に配慮して、適切に行う必要がある。

2　評価の工夫

(1)　評価の基本的な考え方

ア　地理歴史科の評価の観点及びその趣旨

評価の観点	趣　　旨
関心・意欲・態度	歴史的・地理的事象に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究するとともに、国際社会に主体的に生きる国家・社会の一員としての責任を果たそうとする。
思考・判断	歴史的・地理的事象から課題を見いだし、我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色を世界的視野に立って多面的・多角的に考察するとともに、国際社会の変化を踏まえ公正に判断する。
資料活用の技能・表現	諸資料を収集し、有用な情報を選択して活用することを通して歴史的・地理的事象を追究する方法を身に付けるとともに、追究し考察した過程や結果を適切に表現する。
知識・理解	我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての基本的な事柄を理解し、その知識を身に付けている。

イ　評価に当たって配慮すべきこと

単元や項目ごとの各観点の目標を明確にし、目標が達成されるよう指導を展開した上で、評価を行う必要がある。また、一部の観点に偏らないようにするなど、客観性や信頼性を備えた評価となるよう配慮する必要がある。

(2)　評価の工夫

ア　目標に準拠した評価を行うために、学習指導のねらいを明確にし、そのねらいが実現されたかどうかを評価する方法・手段を準備することが必要である。

イ　「知識・理解」以外の観点をも重視したバランスのとれた評価を行うために、ペーパーテスト以外の評価の方法・手段を工夫するとともに、ペーパーテストにおいても「知識・理解」以外の観点を評価することができるよう工夫することが大切である。

3　学習指導案の作成

(1)　「世界史A」の学習指導案（例）

I　単　元　名　(1)　諸地域世界と交流圏
　　オ　ユーラシアの交流圏
　　(ｱ)　海域世界の成長とユーラシア　　配当時数　3時間

II　単元の指導計画　1　ムスリム商人と中国商人による海域ネットワーク　2時間
　　2　ユーラシアの海域ネットワーク　1時間（本時）

III　本時の目標　1　陶磁器、銅銭、香辛料などの具体的な交易品に着目させ、ユーラシアの諸海域を結ぶネットワークが形成する過程を把握させる。
　　2　13・14世紀に、海のネットワークが発展し、後の「大航海時代」につながっていくことに気付かせる。

IV　本時の展開

指導段階	指導内容	学習活動	指導上の留意点と評価の観点
導入	海上交易路の発展	・『シナ・インド物語』などの文献から、9～10世紀頃のムスリム商人が、環インド洋交易圏だけでなく、中国の情報を得ていたことを読み取る。	・ムスリム商人の交易圏の拡大に関心を示したか。【関】
展開	発展する「海の道」	・前時に書き込んだ白地図で、バグダードを拠点とする環インド洋交易圏と、広州を拠点とする東アジア交易圏を再確認する。	・小海域世界が重なりを持ちながら、連関して交易圏が成立していることを確認する。 ・環インド洋交易圏と東アジア交易圏の重なる海域があることに気付いたか。【資】
	航海技術の発展	・航海に必要な技術についての発問に答える。 ・11世紀末頃(宋代)、中国商人がジャンクに羅針盤を使用していたことを理解する。	・航海技術の発達が、海上交易の発展に寄与したことを理解したか。【知】
	変化するユーラシアの交易品	・古代からのユーラシアの代表的交易品について考える。	・「シルクロード」を想起したか。【知】
	①陶磁器	・「海の交易路と中国の陶磁器の出土地の分布図」を見て陶磁器の需要の広がりを理解する。	・分布図から、環インド洋交易圏において、中国の陶磁器が重要な交易品となったことに気付いたか。【資】
	②銅銭	・宋代に、中国の銅銭が大量に輸出され、東アジアから東南アジアにかけての広い地域で、通貨として流通していたことを理解する。	・我が国でも鎌倉時代に「宋銭」が利用されたことに触れる。
	③香辛料	・ムスリム商人が、香辛料を西方への重要な交易品としていたことを理解する。 ・都市人口が急増した宋代の中国で、大量の香辛料を輸入するようになったことを理解する。	・香辛料が、環インド洋交易圏と東アジア交易圏の両方において、重要な交易品となることを把握したか。【知】
		・交易品の変化と、輸送手段の変化を結び付けて考える。 ・交易品を通して、交易圏が拡大してくることを認識する。	・それまでの絹や宝石と異なり、大量の陶磁器や銅銭、香辛料を運ぶためには帆船が便利であることに気付いたか。【思】
	変化する交易ルート	・環インド洋交易圏の中心都市がバグダードからカイロに変わることを理解する。 ・地中海交易圏で香辛料が重要な交易品となることに触れる。	・アッバース朝の滅亡(1258年)により、イスラムの世界の中心が変わることに触れる。 ・香辛料の需要が、地中海交易圏と環インド洋交易圏を結び付ける要素になったことに気付いたか。【思】
	海のネットワークの形成	・13～14世紀に、ユーラシアの海域ネットワークが形成されることを、地図を見ながら確認する。	・フビライとマルコ＝ポーロなどに触れ、13世紀のモンゴルが、海上交易にも力を入れていたことも把握される。
整理	世界の一体化へ	・16世紀のポルトガルが環インド洋交易圏に参入することによって、世界の一体化につながっていくことを予感する。	・ポルトガルが香辛料交易による利益を求めて進出してきたことに気付いたか。【思】
	次時予告	・「地中海域とユーラシア」について学習	・次時は地中海に視点をおくことを予告する。

【関】＝「関心・意欲・態度」、【思】＝「思考・判断」、【資】＝「資料活用の技能・表現」、【知】＝「知識・理解」

(2) 「日本史A」の学習指導案（例）

I 単　元　名　(2) 近代日本の形成と19世紀の世界
　　ウ　国際関係の推移と近代産業の成立　配当時数　9時間

II 単元の指導計画
1　立憲国家をめざして　1時間
2　憲法制定と議会の開設　2時間
3　東アジアの国際環境と条約改正問題　1時間（本時）
4　朝鮮をめぐる対立と清国との戦い　2時間
5　藩閥・政党の対立と協力　1時間
6　ロシアとの戦い　1時間
7　日露戦争後の国際関係と日本　1時間

III 本時の目標
1　調べ学習を通して、条約改正の経緯とその意義について、国内情勢と国際情勢の推移に着目して考えさせる。
2　条約の改正により、不平等な立場を脱却することができたことを理解させる。

IV 本時の展開

指導段階	指導内容	学習活動	指導上の留意点と評価の観点
導入	大日本帝国憲法制定に関しての前時の復習	・憲法制定、帝国議会開設の意義について、質問に答える。	・日本が憲法と議会をもつ近代的な立憲国家となったことを想起させ、前時の学習内容の定着度を確認する。
展開	不平等条約の内容	・日米修好通商条約について、中学校における既習事項をワークシートに記入する。	・領事裁判権を認めたこと、関税自主権がないことなどを想起させる。
	欧米列強の東方への進出	・イギリス、フランス、ロシア、ドイツ、アメリカの東アジア、東南アジアへの進出拠点を、年表と地図をもとに白地図に記入する。	・列強の勢力範囲が拡大していることに気付かせる。
	条約改正への努力と国際情勢の変化	・グループごとに①～④から一つのテーマを選択し、条約改正期の国内情勢と国際情勢の変化について、教科書、図表、史料、風刺画等を活用して調べ、ワークシートにまとめ、教師の質問に答える。	・グループ内での協力体制、役割分担などを適切に行い、積極的にテーマに取り組んでいるか。【関】
		①井上馨と欧化政策 「鹿鳴館と舞踏会」の絵を活用	・欧化政策の意図を資料を用いて説明することができたか。【資】・【思】
		②ノルマントン号事件 「ノルマントン号事件」(ビゴー筆)の絵を活用	・事件の内容を資料を使って説明することができたか。【資】・【思】 ・領事裁判権撤廃の世論が強まった経緯を説明することができたか。【資】・【思】
		③大隈重信による改正交渉 「大隈遊難」（図表）を活用	・大隈重信が襲われた理由を説明することができたか。【資】・【思】
		④青木周蔵による改正交渉 「榎本武揚外相の意見書」（史料）を活用	・イギリスが条約改正に好意的な態度を示すようになった理由を、当時の国際情勢を踏まえて説明することができたか。【資】・【思】
		・他グループが調べた内容をワークシートにまとめる。	・他グループの応答を聞きながら、ワークシートに内容を記入しているか。【関】
	不平等条約の改正	・陸奥宗光、小村寿太郎による条約改正交渉の内容と結果について、教師の説明を聞き、ワークシートに要旨をまとめる。	・「日英通商航海条約」（史料）を紹介し、領事裁判権が全面撤廃されたことを理解させる。【知】 ・関税自主権の完全回復が日露戦争後の1911年で、日本の国際的地位の向上が背景にあったことを把握させる。
整理	条約改正の実現	・条約改正実現までの経過を概観し、東アジアにおける国際環境の変化と日本の国際的地位の向上が、条約改正に影響を与えていることを理解する。	・条約改正を通して日本と欧米列強との関係の変化を理解した上で、次時に、近隣の国である朝鮮、清国と日本との関係についての学習に入るよう留意する。
	次時予告	・「朝鮮をめぐる対立と清国との戦い」について学習	・次時は、清国・朝鮮と日本との関係に視点をおくことを予告する。

【関】＝「関心・意欲・態度」、【思】＝「思考・判断」、【資】＝「資料活用の技能・表現」、【知】＝「知識・理解」

(3) 「地理B」の学習指導案（例）

I 単　元　名 (1) 現代世界の系統地理的考察
イ 資源、産業
(ア) 工業から見た世界　　配当時数 6時間

II 単元の指導計画
1 工業の発達と分化　1時間
2 立地条件の種類と変化　2時間
3 工業の立地移動の国際化　1時間（本時）
4 世界の工業地域　2時間

III 本時の目標
1 工業の立地移動が国内だけでなく、国際的なものへと変化してきていることを資料の活用などを通して認識させる。
2 国際的な工業の立地移動が、国家や世界規模の地域にも大きな影響を及ぼしていることを理解させるとともに、日本の工業の将来的な動向について考えさせる。

IV 本時の展開

指導段階	指導内容	学習活動	指導上の留意点と評価の観点
導入	立地条件について前時の復習	・立地条件は時代や社会環境の変化に伴って、どのように変化するのか、前時の事例地域をもとに質問に答える。	
	自動車産業の立地条件の変化	・自動車産業の特色から立地条件の変化について考える。	・前時の事例地域を通した立地条件の変化についての学習を、自動車産業に当てはめて考えようとしているか。【関】
展開	自動車産業の生産拠点の変化	・国内の自動車工場の閉鎖によって影響を受けている地域の事例を示す資料から、閉鎖に至った要因を考える。	・単に、不況による生産台数の削減だけではなく、生産拠点の移動も要因となっていることに気付かせる。
		・日本の主な自動車会社の現地生産工場の所在地を示した資料から、白地図に所在地を記入し、分布の状況を把握する。	・情報を地図化することにより、現地生産工場が、欧米などの自動車の大消費地域だけでなく、発展途上国にも分布していることに気付いたか。【資】
	現地生産の増加の背景	・日本の自動車のアメリカへの輸出台数と現地生産台数の推移を示すグラフから、なぜ現地生産が増えてきたのかを考える。	・現地生産を増やすことが、アメリカとの貿易摩擦の解消につながっていることに気付いたか。【思】
		・東アジアや東南アジアなどへの生産拠点の移動の理由について考える。	・日本の輸出競争力の低下から、生産コストを抑えるために人件費の安い地域に進出していることに気付いたか。【思】
	産業の空洞化の影響	・産業の空洞化などの状況から、今後の日本の企業の動向についてグループで考え、発表する。	・企業経営の面とともに、労働者の雇用の面からも考えさせる。 ・考察した過程や結果を、論点を明確にして発表したか。【資】 ・日本国内の経済構造だけを考えても解決の糸口は見出しにくいことに気付かせる。
	経済活動の国際化	・電気機械製品や繊維製品などの生産国表示を実際に調べ、日本企業の海外生産拠点で生産され、日本に輸入されている製品が多くなってきている状況を把握する。	・中国で生産された製品の販売により急成長した繊維関係の企業の例や、中国で生産されたスクーターが日本で販売されることを報じた新聞記事を示し、自動車産業以外の産業でも海外に生産拠点を移す企業が増えていることを実感させる。
		・京浜工業地帯の工場の分布を示す新・旧の地図の比較により、工場数の減少を読み取り、産業の空洞化が進んでいる状況を把握する。	・地域の変化を示す新・旧の地図から、産業の空洞化が地域に与える影響の大きさを都道府県の規模でとらえることができたか。【資】
		・経済活動の国際化の進行により、世界の企業の多くが多国籍化し、国際的な分業のもとで規模を拡大していることを理解する。	・自動車産業以外でも経済活動の国際化が進行し、日本企業もそ影響を受け、雇用形態にも変化が出ていることに触れる。【知】
整理	工業の立地移動の国際化と世界の工業地域	・世界の主な工業地域を示した地図を大観し、工業の立地移動の国際化により工業地域も大きく変化していることを理解する。	・工業地域は、常に変化しているものであることを理解した上で、次時の「世界の工業地域」の学習に入るように留意する。
	次時予告	・「世界の工業地域」について学習	・次時は、国際分業の進行による工業地域の変化に視点をおくことを予告する。

【関】=「関心・意欲・態度」、【思】=「思考・判断」、【資】=「資料活用の技能・表現」、【知】=「知識・理解」

4　質疑応答

問１　地理歴史科と公民科は、どのような関連性があるのか。また、指導計画の作成に当たって、どのような配慮をする必要があるか。

地理歴史科の目標とする「国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う」ことは、公民科の目標である「民主的、平和的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民として資質を養う」ことと密接なかかわりがあるとともに、内容的にも地理歴史科の各科目と公民科の各科目との間に相互に関連する部分が多い。

また、地理歴史科の学習においては、日本や世界の各時代及び各地域における風土、生活様式や文化、人々の生き方や考え方などを学ぶことが求められ、公民科の学習においては、社会的事象に対する客観的で公正な見方や考え方を深めるとともに、人間としての在り方生き方について考える力を一層養うことが求められているなど、それぞれの教科における視点の相違が見られる。

したがって、地理歴史科の各科目の指導計画の作成に当たっては、公民科の各科目との関連部分や視点の相違などを考慮して調整を図るとともに、指導内容の無駄な重複を避けるよう十分配慮する必要がある。

問２　地理歴史科と公民科との関連の深い内容には、どのような具体例があるか。

地理歴史科と公民科との十分な連携を図った上で学習内容を吟味する必要があるが、具体的には次のような例が考えられる。

(1)　世界史及び日本史の近現代史において、核兵器の脅威に着目させ、戦争を防止し、民主的で平和な国際社会を実現することが重要な課題であることを歴史的視野から考察させることと、「現代社会」及び「政治・経済」において、核兵器の開発、使用及び広範な配備が国際社会に及ぼした影響や国際連合を中心とする軍縮への取組について理解させ、軍縮に向けて不断に努力することが国際平和の実現につながることを認識させること。

(2)　世界史及び日本史において、思想や宗教、芸術などが生まれた歴史的背景を理解させることと、「倫理」において、世界や日本の思想や宗教などの基本的な考え方を代表する先哲の思想、芸術家とその作品などを取り上げ、人間の存在や価値にかかわる基本的な課題を探究させること。

(3)　地理において、領土問題について世界的視野から地域性を踏まえて追究し、その問題の現れ方には地域による特殊性や地域を超えた類似性がみられることをとらえさせ、現代世界の地理的認識を深めさせることと、「現代社会」及び「政治・経済」において、領土問題については、我が国をも含めて様々な国家間で未解決の問題があるが、国際平和の維持と安定のためにも、平和的な解決に向けて広い視野に立って継続的に努力する態度が必要であることを認識させること。